かるかや物語を伝える会

かるかや物語の始まりの地である太宰府。かつては小学校の学芸会の定番の劇であったほか、現代でも全国的にも有名な話です。しかしながら、地元ではあまり知られていません。また、「関屋」の地名の由来である苅萱の関についても同様です。

そこで地元の坂本区と通古賀区の住人を中心とした「かるかや物語を伝える会」が発足しました。会では物語の舞台である「苅萱の関跡」を、地域が誇る貴重な文化遺産として大切に守っていきます。また、全国的にも知られているかるかや物語を、これからも地域の文化遺産として伝えていくために、地元の坂本区、通古賀区の住民とともに育成していきます。

平成26年1月23日に「かるかや物語を伝える会」を発足

＜活動内容＞

- 苅萱の関跡石碑周辺の美化活動
- 苅萱の関、かるかや物語についての学習会の実施
- 地域の人々に苅萱の関跡と「かるかや物語」を伝えるための行事を行う

石碑の美化活動風景

太宰府市民遺産とは・・・

市民の一人ひとりが、大切に思うモノ・人・出来事。これを将来に伝えていきたいと思う物語と、守り育てる活動に対して、多くの市民が太宰府にとって大切なんだと納得したものです。

■例えば

○まちづくりの基礎をつくりあげた人
○四王寺山の堂々たる姿が見える場所
○いつもお詣りしているお地蔵さん
○道ばたにある、むかしの道標
○40年つづく団地の夏まつり

太宰府市民遺産ロゴマーク
http://市民遺産.jp

など、将来に伝えたい太宰府の個性がたくさんあります。

苅萱の関跡とかるかや物語

太宰府市民遺産：第9号
認　　定：平成26年3月22日
景観・市民遺産育成団体：かるかや物語を伝える会
発　　行：太宰府市教育委員会
発 行 日：平成26年7月19日

太宰府市民遺産

第9号

苅萱の関跡とかるかや物語

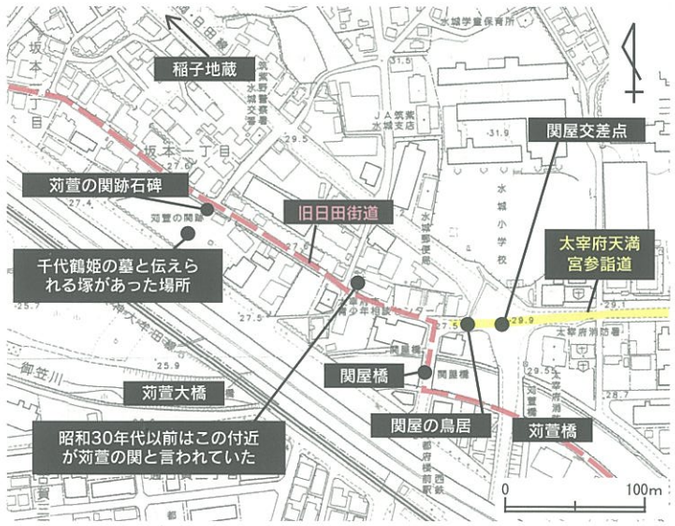
かるかや物語を伝える会

苅萱の関とその位置

太宰府市坂本の「関屋」の交差点の付近にあったと伝えられる関所のことです。関所の正確な場所や詳細はわかりませんが、文献史料や絵図から関屋の鳥居あたりとみられています。

関の記述については、菅原道真が大宰権帥として赴任した際に詠んだ歌に登場します。文明12年（1480）には、連歌師宗祇が『筑紫道記』に苅萱の関についての記述と和歌を残しています。また、豊臣秀吉が九州平定に来た際に関の記述がみられますが、この時には「苅萱の関跡」となっており、すでに関所は機能していなかったことがわかります。江戸時代には、関屋は太宰府天満宮参詣道と日田街道が合流する場所となり、人の往来も多く賑わいをみせていたようです。また、江戸時代の絵図に「苅萱関跡」が紹介されているほか、明治期から昭和初期には観光案内や絵はがきにもみられ、太宰府の観光名所にもなりました。

かつては石堂丸の姉・千代鶴姫の墓とされる塚があり、その塚の場所に「苅萱の関跡」の看板が建てられましたが、現在は旧道沿いに石碑が建っています。



苅萱の関跡周辺図

千代鶴姫の墓（昭和初期の絵はがき）

苅萱の関跡周辺には、かつて存在した千代鶴姫の墓のほか、関跡に関わる名前がいくつか確認できます。

太宰府におけるかるかや物語

― 苅萱道心と石堂丸の悲話[※1] ―

苅萱の関の関守であった加藤左衛門尉繁氏（後の苅萱道心）は、花見の席で桜が散ったことに無常を感じ、子を宿した妻（千里）と娘（千代鶴）を残して出家し、苅萱道心として高野山で修業に励みます。

残された妻は、繁氏の出家後に生まれた石堂丸[※2]とともに高野山を訪ねました。しかし、高野山は女人禁制のため、石堂丸が一人山に入り父を捜します。

何日もかけて歩き捜し続けると、ある日一人の立派な僧に出会います。この僧こそ実の父である苅萱道心でした。道心は石堂丸の話を聞き、彼が自分の子であると気づきますが、今は世を捨て仏門に入った身であることから、父だと名乗ることはできず、父は亡くなったと伝えます。石堂丸はやむなく麓の宿にもどると、母は長旅の疲れで亡くなっていました。また、筑紫に帰ると姉の千代鶴もすでに亡くなっていたのでした。

身よりのなくなった石堂丸は、以前に出会った道心を訪ねて再び高野山に上がりました。そして弟子入りし、修業に励みます。

石堂丸は苅萱道心を父とは知らずに修業に励みました。苅萱道心もまた石堂丸に生涯父と名乗ることなく修業を続け、この世を去りました。

この物語は、仏教説話にある八苦の一つ「愛別離苦」のお話です。中世に高野聖によって全国に広められ、浄瑠璃・歌舞伎・文楽・能の題材にもなっています。前半の舞台は太宰府であり物語の特に重要な部分を担っています。

物語に関わる文化遺産

稲子地蔵

太宰府市国分の通称「宝満隠し」という丘の西側に稲子地蔵があります。

繁氏の身代わりとなって命を落とした侍女・稲子を祀ったという話や、宝満山の山伏に恋をした稲子の話など、様々な謂われがあります。

※1.出典や地域によって、人物名や物語の内容が若干異なります。
※2.石堂丸については「石童丸」とも表記されますが、太宰府では「石堂丸」と表記されることが多いことからこの表記を使用しています。

全国に見られる物語ゆかりの地

繁氏の出生にまつわる物語が伝わる。「苅萱地蔵」や「子授け地蔵」とも呼ばれている。

道心が開いた寺とされ、道心と石堂丸が刻んだ「刈萱親子地蔵」が伝わる。童謡「夕焼け小焼け」の鐘が有名。

物語後半の舞台である和歌山県には苅萱道心と石堂丸が修行に励んだ高野山苅萱堂や石堂丸の母を弔ったとされる学文路苅萱堂があります。また、長野県には道心と石堂丸の親子二人が作ったとされる親子地蔵が伝わる往生寺や西光寺があり、絵解きによる伝承が行われています。

地元での伝承活動

『郷土読本中巻』（太宰府市文化ふれあい館蔵）

かるかや物語はかつて水城尋常高等小学校の『郷土読本』（昭和12年発行）に掲載され、子どもたちに教えられていました。

また、水城小学校の学芸会の定番の劇として講堂で度々演じられたほか、昭和30年（1955）には、旧太宰府町と水城村の合併記念として、水城小学校の生徒によって「石堂丸」が太宰府天満宮の文書館で演じられています。

以後も小学校で演じられていましたが、いつしか物語の演劇は行われなくなりました。